

イギリス革命の危険な諸相

小野 修

1. 内乱への道

チャールズ一世は一六三七年、スコットランドの長老教会で使われている Johe Knox 編の祈祷本をやめさせて、かわりに英国国教会で用いている新祈祷書をカンタベリー大司教の William Laud とチャールズに近い国教会の主教の手でスコットランド向きに改訂して使わせようとしたためにスコットランドの国民を敵にまわしてしまった。

彼らは長老派教会を死守する覚悟で互いに盟約を結び、チャールズの遠征に備えて一万六千の兵を挙げて一步も引かぬ姿勢を示した。チャールズはこれに対し二万の兵を率いて討伐に向かったが国境付近で対峙したあと戦闘を避けた。彼は自分の率いる兵よりも戦意において勝るスコットランド軍と互角に戦えると思えなかったので、スコットランド側が無駄な血を流すことを避けようとしていたこともあって和睦を結んだ。チャールズとしては時間をかせぎ、充分は軍備を整えた上で再度交渉に赴くことを考えたのであった。

一六四〇年、軍拡の予算捻出のため、チャールズは一六二九年から一度も開いていなかった国会を召集した。十一年ぶりに開かれた議場の雰囲気は以前とはすっかり変り、王と議会とのあいだには歴然とした反感と対立の状況が生じていた。この十年あまりのあいだチャールズはヨーロッパの三十年戦争の拡大等にそなえて海軍力の増強に力を入れ、その収入の為に船舶税や輸入ワインに課したトン税ポンド税など国家の承認を必要としない税収を図ってきた。しかし、陸軍の増強の為にこの方式を利用して一六三四年以降毎年課税を行ったために海運業者等から反撥を受け、バッキンガム州

選出議員の郷紳、John Hampden は納税を拒否する裁判で争ったが敗退した。このときの評決では少数乍ら徴税方法にむしろ違憲性があるとしてハムデン側に与するものがあつたのは新しい時代の到来を予感させるものだった。チャールズはこのようにして徴収した税金を他に流用せず軍備にあてていたが、その徴税方法が国会軽視であつて好ましくないと批判していた者の中には、チャールズの軍事部門の総師であつた Strafford 伯 (Thomas Wentworth) アイルランド総監 (代理) のような人物までいた。

ストラフォード伯としては、もしスコットランドと決戦になれば英国民の忠誠が喚起されることになるだろうと予測した上で、一応国会に軍事予算の措置を求めておいて、拒否されたら、その段階で船舶税などを大っぴらに強制することができると考えていた。

この様な状況で開かれた議会は、当初から John Pym 議員をリーダーとして王の過去十年の課税方法の行き過ぎと国会軽視の慣例にたいする手厳しい批判が重ねられ、王がこうした徴税方法を撤廃しない限り王の求める予算措置は行われぬという意志を示し、その上にスコットランド遠征に反対する請願書を提出していたので形勢不利と見たチャールズは三週間で議会を解散した。

Thomas Hobbes が『法学要綱』(*The Elements of Law*) を完成し、手稿ながら王党派議員に回覧したのはこの時期であつた。この論旨が王権の擁護であつたので王党派からは評価されたが、その為に、議会派からの報復を怖れる理由となつた。ストラフォード伯はホップズの知り合いであつた Newcastle 伯の友人であり、王権を擁護したが、権力を王と上院と下院に分割する制限王制を主張していた。他方、ホップズと同様に絶対王制を唱えたマナリング主教はその学説故に、時あたかも権利請願 *Petition of Right* がチャールズによって確認されて法制化された一六二八年、囚われてロンドン塔に投獄された。1640年5月5日短期議会が解散され、11月に予定された長期議会が始まればストラフォード伯やロード大司教の糾弾は確實視されていた。急激に議

会派が勢力を増しつつある今、ホップズは「保身のために転進する潮時と考え、去ってフランスに行き、パリに居をかまえた」¹⁾とホップズについて書いている伝記作家の *Joha Aubrey* によると、ホップズがこのようにイギリスの国王と議会の関係に深く関心を抱くようになってからの十年間（つまり、チャールズの処刑の一六四九年まで）、彼の思考はほとんど数学から離れてしまい、関心はもっぱら『市民について』(*De Cive*, 1647) と『リヴァイアサン』(*Leviathan*, 1651) の執筆に注がれたという。

五月に開かれた短期議会で反国教徒の勢力のために成果をあげることができなかったチャールズの弱腰をみてスコットランド軍は国境を犯して英国北部ノーサンバーランドとダラムを占領、要求の貫徹と駐留経費の支払いを要求した。十一月、チャールズは兵力の動員と戦費確保のために国会を召集したが、結果としてチャールズが国会の解散権までも失った為、いわゆる長期議会となった。非国教徒が指導権をにぎったこの議会においてチャールズは歴代の王が議会に頼ることなく自由に行使してきた船舶税等の課税権や上納金、あるいは半強制的な寄付などの習慣をすべて放棄させられたばかりか、チャールズの軍事部門の総師のストラフォード伯の国会への召喚を迫られた。

ストラフォード伯はチャールズの腹心であり、アイルランド副総督代理をつとめ、アイルランド現地軍の総司令官であった。従って議会派にしてみれば、チャールズは英国軍の動員ができなくてもストラフォード伯にスコットランドを討伐させるかもしれないし、ことによっては英国議会を包囲させて反党派を服従させるために利用するかもしれない、と憶測したとしても不思議ではない。反対派にとってはストラフォード伯は何よりも大きな障害であり亡き者にする必要があった。他方ストラフォード伯は国会を重視する人であったので召喚に応じ、弾劾裁判において弁明につとめ、その雄弁で一旦は容疑が晴れた。しかし、反対派に煽動された民衆がチャールズの宮廷を取り囲みストラフォードの処刑を要求しつづけたので、遂にチャールズはスト

ラフォード伯を反逆罪容疑で召喚したいという国会からの要求をつきつけられて、召喚を認める詔書に著名すべきか、それとも拒否して自分の片腕とも云うべき重臣ストラフォード伯をまもるべきかの判断に24時間悩まされた。「余の名に誓って覚殿の生命、名誉、財産は守ってやる」と約束していたチャールズであった。その挙句、妃で王の軍事顧問でもあった Henrietta Maria (カトリック教徒) のすすめもあり、ストラフォード自身も国の治安維持を重視して、国会の要求に応ずるように説得したこともあって、チャールズは不承不承、国会の要求に承認を与える為、Bill of Attainder (私権剥奪法) にもとづく詔書に著名した。ストラフォード伯は逮捕され三日後にロンドン塔の近くの岡で数万人の注視のもとに処刑されてしまった。²

チャールズのもとで宗教上の最高指導者であったカンタベリー大司教のロード大司教も弾劾裁判の結果ロンドン塔に送られ三年後には処刑された。ロードはピューリタンを処罰するのに苛酷ではなかった。勤勉で新しい時代の生産力を担う彼らを罰金と収監によって国教の遵守を促そうとしたが、ピューリタンはその束縛をも嫌って当時チャールズが積極的にすすめていた新大陸への移住を選び、一六三〇年から一六四三年の間に三万人がアメリカに渡り、その三分の一がマサチューセッツを中心とするニュー・イングランド地方に定住した。ここでは母国よりも厳しい宗教的規律が強制されたので束縛を嫌う者は更に他州に逃れた。

チャールズはこの長期議会で星室庁 Star Chamber と名づけられた国王直属の刑事特別裁判所の廃止をも認めさせられた。この裁判所はヘンリー八世が一四八五年に創設し、通常の裁判所とは異り、地方領主の専断と横暴から庶民を救済する目的でつくられたもので王の即決の裁決により、迅速な対処可能な仕組みになっていた。しかし、活用の仕方によってはチャールズの課税方法に反対するハムデンの場合のように莫大な料金を命ずることや、大主教批判の著作を刊行した Alexander Leighton に対するように罰金、四肢切断、終身刑を課したり、William Prynne のように耳をそがれた上に、王と妃

を誹訪したパンフレットを刊行した罰として両頬に S と L（教唆の *seditious*，反逆の *rebellius* の頭文字）の烙印を押させたりする宗教裁判所としての処分を実行し、非国教徒からその存在を怖れられ且つ憎まれていた。³しかし、この廃止によって貴族や新興階級の富裕層が土地を投機目的で収用して行った際、土地財産を収奪された小土地所収者たちが権利の回復を求めて王に訴えて行く唯一の拠り所が失われた。これが専断不公正の判決を行うとして不満を示したのは有力貴族や貧欲な新興ブルジョアジーが恣意的な投機を阻まれたからであった。従って、チャールズが一六四一年星室庁を廃止したあと庶民は新興階級の気儘な収奪の犠牲となるほかなかった。

父君ジェームズ一世が王権神授説を自説にかかげて英国の王位につきながら、なお安定した治世を行い得た秘密は、王を支えた官僚層をスコットランドからロンドンに連れてきたからであった。チャールズ一世には王権を支える官僚組織がなかった。チャールズの妃がルイ十三世の妹であった縁故からチャールズがブルボン王朝の統治方式から学んだ点は兵力増強のほか、宮廷に豪華趣味を持ち込むことと強権的な統治の姿勢くらいであったが、フランスをまねて王権を支える強固な官僚機構をつくることを怠った。

王が議会を掌握する秘訣は相互の意志疎通であり、その為にこそチューダー王朝で制度化した大法官がウィリアム・セシルの場合のように主席顧問としてエリザベス女王に仕えて地方領主や宗教界の有力者を統率することができた。エリザベス女王が常備軍を備えていなかったことも財政負担を軽くする点で賢明なことであったが、これは宗教政策を含めて、王に対する国民の圧倒的な支持があったからこそ可能であった。チャールズ一世はこのチューダー王朝の伝統を軽んじ、妃の出身のフランスをまねてアイルランドに常備軍を創設することに踏み切ったとき、それが自分の権力を強めるところかむしろ王権の破綻を早める原因となることに思い知らなかった。

ストラフォード伯が反逆罪で処刑された一六四一年、北アイルランドでは同伯の指揮下につくられたアイルランド方面軍が解体された。頭を失った備

兵たちは意趣返しに英国系植民者たちを襲ったが、このことが大げさに誇張されて、数万人の英国人が殺戮されたとロンドンに伝えられた。プロテスタントの牧師は礼拝の説教の際にアイルランドのカトリック信徒にたいする怒りと報復の感情を不必要にあおりたてた。八年後、クロムウェルによるアイルランド遠征時の大量殺戮の原因はこのデマに惑わされた為と見ることができる。⁴

しかし庶民のすべてがチャールズを見捨てたわけではない。星室庁の廃止で民衆は王権の保護を失い、プロテスタント系の投機業者や成金の収奪にまともに身をさらすことになり、事態の容易ならざることに気付きはじめた。君主がその権能を次々に剥ぎとられて行くことに不安と怒りを示すものと、喜ぶものとの間に対立が生じ、ロンドンの路上での両派衝突も見られた。

議会の反王党派は多数派の勢いに乗じチャールズに大諫議書 (Grand Remonstrance) をつきつけることとし、王が閣僚を任命するときは議会の承認を得て行うこと、国教会をピューリタン寄りに改革することなどをとり決めた案を、王党派を圧さえて僅差で成立させた。そればかりか、反王党派は妃アンリエッタ・マリアがチャールズの軍事顧問的な役割を果していることから、彼女を弾劾裁判にかけようとしていた。このほか、英国北部に侵入したスコットランド軍と秘密裡に反逆的な謀議をかわしていたことが発覚した為、一六四二年一月三日、チャールズはこの陰謀に参加した五人の議員、Hollis, Haselrig, Hampden, Pym, Strode を弾劾裁判にかけようように上院に要求した。しかし、反逆罪の審理は下院の権限であり、会期中の議員には逮捕されない議員特権があるとして、上院が辞退してきた。この段階では王の側にはすでに充分の賛同者があったのに、チャールズが、敢て自分自らの手で逮捕しようと軽はずみな決意をしてしまったのは、妃とそのとりまきから、何の手もうてずにいることを臆病よばわりされ、自分の名誉のみを気にかけている為だとなじられたからであった。⁵

David Hume はこのときの王の行動を次のように記録している。

翌日、王は約二百名の兵士を通常武装（鉾槍ないし長劔仕込杖を所持）の上随行させて議場に至り、兵士を入口で待機させると単身で場内に進んだ。議員全員が起立して迎えた。議長が席を外すと王はその席に座り、手短かに問題の議員の身柄の提出を求めたが、彼らはすでにカーライル伯爵夫人からの内報を得て身をかくしていた。王が演壇の下に立っていた議長に向って、指名された議員たちの誰かが議場内にいるか問うと、レントール議長は膝まづき慎重な口ぶりでこう答えた。「私はこの場では、見えるとも何とも申し上げかねますが、議会に仕える私より、議会が教えてくれると思います。誠に申し兼ねますが陛下のご質問にはこれ以上お答え申し上げられませぬ、ご容赦下されませ」「そうか、そうか」と王は応えた。「かまわぬ。余の眼も人並みに利くからのう」と議席を見渡したが見つからなかった。「鳥どもは皆飛び立ったと思えるな、奴らが席に戻り次第お前が出頭させるのだ、頼んだぞ、さもないと、朕が手を打たねばならぬからな」議長の返事は不機嫌なものではなかったから、王も気を悪くした様子はない。しかし、扉のあたりまできたとき、王の背中に向かって「特権、特権」と合唱する議員たちの声が浴びせられた。

この次の日、王はロンドン市会に数名の貴族と出席、日頃の協力に感謝を表した慇懃な挨拶を行ったが往復の市中では至るところで「議員特権！」という叫びをきいた。中には勇敢な民衆の一人は近づいてきて、まるめた紙片を馬車の中に投げ込んだ。紙には「帰れ、自分の陣営に！」と書いてあった。一年前のアイルランドで現地在留民が殺された騒ぎを想起して、街中が反カトリック、反王党派になって、異常な興奮のしかたで造反議員をかばっているようであった。バッキンガム州からはハムデンなどの議会派を支援する目的で騎馬隊が到着、テムズ川の河面には軍需物資を運ぶはしけがひしめいて戦闘に備えるかまえを見せはじめていた。

この数日後、下院は王が握っていた非常大権を剥奪し、下院に民兵の召集

と司令官の任命権を与える動議を可決するとすぐ閉会、上院もこれにならなかった。王から逮捕状の出ていた議員はテムズ河からボートで登院し、河の上は護衛の小舟がひしめいた。上下する舟からは宮殿の横を通過する際、「王や騎士たちはどこに逃げたのか。」と罵声が飛んだ。チャールズは市民の敬意の昂揚にそろそろ身の危険を感じずようになったので、一月二〇日には五名の議員の訴迫の取り消しを公表したが効果はなかった。

王は遂に妃と娘のメアリ（後のオレンジ公ウィリアムの妻、英国女王）をオランダに疎開させる為にドーバーの港まで見送りに行った。この間、下院はハルにあった軍需廠倉庫を抑え、近郷の John Hotham という名門の郷土をその管理者として、州知事待遇で任命した。その為、チャールズがロンドンを発ってハルにしばらく泊りたいと思ったが、ホザムは扉を締めて王を拒んだ。軍港ポーツマスの知事には議会命令以外には従わぬよう指令を出す一方、王に対してはロンドン塔の管理権を議会の信任できる人物に委任されるよう懇請し続けた。更に、ローマカトリック教徒ならびに不隠分子の破壊活動に備えて民兵組織をつくり、国の軍事力の全権を議会に委託する件を上下両院で成立させた。更に全国の知事、副知事をいったん罷免した上で、後任に議会寄りの人物を任命し、その罷免権が王にではなく議会にあることを成文化した。この法案にたいして王は反対で言を左右にして下院の要請を受け流していたが、下院は王が迅速に承認しなければ、君主と人民の安全の為に両院がその権威に基づいて軍事組織の処分を断固実行すると迫った。しかもその力まかせの要請を続ける間、王にはロンドンに居住を定めるよう求めた。しかし、チャールズは武力を背景に押しつけられた民兵法案を承認させられることを避ける為に、皇太子とヨーク公を伴ってヨークに移動した。議会派に反撥する両院の議員や有力な貴族たちも王の側につく為に続々とヨークに向かった。ヨークの当局は王の警護に六百人の兵士を召集したが議会はただちにそれを王の約束違反として王の政府の不信任を票決であらわした。その一方で議会は兵を募り、一日で四千名が登録を行った。軍事的衝突は避け難くな

った。

この段階での議会側の手の打ち方の迅速性と強引さには目ざましいものがある。革命が進行する速度は革命軍の集結エネルギーに比例する。議会の側が巧みに民意を味方につけ、伝統的勢力をうち倒せばただちに自由な社会が実現するという期待を抱かせることによって、集団心理は一挙に加速されて革新側の陣営に組することになる。やがて大量に生命が犠牲にされ、戦場は血の海と化し、家族が路頭に迷うことになるのだが、それがこの段階では読みとれない。一種の集団的狂気の状態においては平常ならば簡単に見分けることのできる危い橋を、集団のヒステリーの状態で一気に渡ってしまうのである。民衆は興奮し変化に期待をかけるが実は確たる保証もない。それに比して、指導層は冷静に、ときには冷酷に民衆のこの興奮と狂気を利用する。革命主体の中枢部は短期間に一気に社会変革を実現することを目指し、その為には武力を用いることも血を流すことも厭わない。政治権力を奪取すること、すべての政治的意志決定を革命権力のものに統合することが第一の目標なのである。革命目的は革命主体の権力の掌握であり、革命主体を支えている新しい実力者たち、つまり、この場合はブルジョア（富裕市民）階級が実権を握ることがすべてに優先する。そのために人民の名は利用すればよい、国民の利益も理由に使えばよい。議会も上下両院とも革命勢力に奉仕させるよう強制すればよい。大切なことは支配権を手に入れ、自分たちの新しい革命勢力が国の予算と軍事力を独り占めにすることなのであって、王がいなければ障害もなく、伝統勢力が亡びれば自分たちの天下はそれだけ安泰なものとなる、と考えたのであった。

「革命は銃口からあらわれる」——という言葉は「革命勢力に反対するものは死んでもらう。革命勢力に協力するものも命を投げ出してもらう」という革命主体本意の考え方を端的にあらわしている。ここには人民の意志は不在であり、人民は単にひき合いに出される存在、cannon fodder にすぎず、人民の為に革命が起こされるというのは子守唄なのである。

David Hume はこのことをよく知っていたと思える。革命戦争勃発直前に議会側からつぎつけた最後通謀の内容を示す次のヒュームの文章は淡々として簡潔である。しかし、ここに含まれた内容はすでに始動し、止め様もなくなった議会派という集団のエゴイズムによる苛酷な支配の前ぶれを感じさせる。

議会はこの段階で条件を提示し協定を結ぶ用意のあることを示した。(六月二日)、彼らの要望は議会に賛意を示さないものは何人たりとも当評議会に出席することを得ずとし、国王の行為は当評議会の承認を得ぬ限り無効とすべきこと、内務関係職員ならびに上位裁判官は議会の同意に基づいて選出され、且つ終身の任用を得ることができること、また、王族の婚姻は議会ないしは当評議会の同意を必要とすること、法律の運用は反カトリックであるべきこと、ローマ・カトリック派の貴族院議員の投票は票数としないこと、教会行事と教会内行政の改革は議会の助言に従って行うべきこと、民兵にかんする命令は提出されるべきこと、議院法廷はすべての非行者をひき渡すべきこと、大赦を発すべきこと、ただし、議会の助言ある場合はこれを除く、すべての砦と城塞を議会の同意を得て放棄すべきこと、議会の同意なき場合新たに貴族を創出してはならないこと。

チャールズがなぜノッティンガムで旗上げしたのかの理由として、ヒュームはこうした恥すべき講和条件をのむくらいなら戦った方がましと王の側は考えたとしている。王の側には少なくとも為政者としての経験と伝統があり治世の実績は歴代にわたって重ねられてきていたのであったが、議会側は歩んだこともない人民民主主義の独裁の道をふみ出そうとしていたのだった。

2. 動乱の風説とホップズ

デカルトは、軍隊に長く身をおいてはいたが、Samuel S. de Sacy の言うように「一度でも戦ったとはとても思えない」生活⁹を送った。その生涯の大半を放浪と瞑想に明け暮れて（それが彼の学問の方法であったにせよ）、ひ

たすら自分の内面をのぞき込んで生涯を過し、宗教的には保守的であった。このような人間にとって、政治に深くかかわりをもったホップズの思想は危険きわまりないものと映った。デカルトは安定したブルボン王朝の支配下に生まれ、彼に懐疑心を起こさせたものは純粹に知的なものであった。それが認識論上、ひいては存在論上の疑念となって彼の若若しい魂をゆさぶった。神は存在するのか、如何にして我々はそれを知ることができるのか、神は何を企図されているのか、それともそれは我々が精神と呼んでいるものの働きにすぎないのか——デカルトが暖炉の火を見詰めながら冥想しつつあった頃、英国ではチャールズ一世と議会の対立が深まり、革命の気運が満ちてくる中で、ホップズは平穏な社会をもたらす方策はないものかと考えていた。ホップズはデカルトと共通する哲学上の関心を抱いてはいたが、動乱の予感の中で厭応なしに政治について考えざるを得なくなっていた。ホップズは国家の安全の基礎は国民の信従に基礎をもつ圧倒的な支配権力の存在であると考えていたが、あるべき王のその支配権力は今や揺らぎはじめていた。

ホップズとデカルトとの間には、お互いを競争相手と見做していた学問上の共通領域があり、その為二人の間には誤解がもとになって不和が生じたことがあった。

二人にはそれぞれ独自にその存在を仮定していた極微の物質があり、この物質が二つのかけはなれた物体を仲介する働きをしていること、また感覚機能には主観性がみられることなど、世界の組成の説明に試みに用いていた。ところが、二人はお互いに気付かぬまま、別個の課題を追求するうちに同じような結論に達していた。そのため、デカルトの依頼に応じてホップズがデカルトの新著 *Meditationes de Prima Philosophia* (1641) 『省察』の批判論稿 *Objectiones in Cartesii de Prima Philosophia Meditationes* (Paris, 1641) を書いて送ったさいに、自分の光学上の論文もそえてメルセンヌ気分でデカルトに送った。デカルトはその論文を読んで自分の学説の剽窃だと誤解し、これが二人の不和の原因となった。1645年二人は再会しその誤解は解けたが、それま

で、デカルトはホッブズの数学上の知識を素人くさいとして馬鹿にしていたし、ホッブズの方はデカルトがイエズス会の機嫌をとるために信じていてもいない transubstantiation 聖餐の化体説〔パンとぶどう酒が秘跡によりキリストの肉と血にかわるとする説〕を擁護したことを許し難い不誠実な行為と考えていた。このようにして二人の価値観の上での違いが親密さを阻む原因となったと考えられる。

デカルトは政治よりは宇宙や人体の神秘に魅せられており、その機能原理を究めることに重きをおいていた。他方、ホッブズは平和で幸福な社会をめざした政治論（つまり、のちに *Leviathan* (1651) となって結実する着想）の完成をめざしていた。従って、二人がそれぞれ別の機会にガリレオに会ったあとの反応の仕方も異なる。ホッブズが（1636年）フィレンツェでガリレオに会っていたころ得た着想は、ガリレオが天文学の探求に数学的方法を用いて成功したのなら、自分は幾何的方法により、宇宙を組成する微粒子を、人民という微粒子が構成する国家の理論におきかえて構築してみようとする画期的なもので、これが発展してやがて政治哲学史上、最高の古典的著作のひとつとなって結実したのであった。

1640年、長期議会でチャールズ一世の右腕ともいえる軍事司令官のストラフォード伯の糾弾がはじまったときホッブズは敏感に身の危険を感じた。ストラフォード伯はホッブズの知り合いのニューカスル伯の友人の一人であったし、ホッブズが前の年に脱稿し手稿のまま友人間に回覧されて好評だった *Element of Law* 『法の原理』（1642年）が国王擁護論と見做されれば官憲から追われる立場になりかねない心配もあった。ホッブズは危害をおそれてフランスに亡命した。

1642年ホッブズは亡命先のパリにいて、チャールズ国王が開催中の議会に着剣して押しかけて、五人の反対派議員を捕えようとして失敗したこと、王と議会との決定的対立から戦闘準備、やがては軍事的衝突へ至る過程を、現地から逃れてきた人々をつかまえては状況を聞きとって分析した。

混乱に向いつつある事態の進行をとめる為この段階でなぜ王は議会に対して軍事的行動を含む強制的な措置をとれなかったのか。ホップズもこの時期の状況を想起したとき同じ疑問を抱いたに違いない。彼は議会側の立場におきかえて二人の人物（AとB）の問答により解説している。°

B 王が海軍力と訓練された多数の兵士、そして弾薬の倉庫をも支配下においていたのに、何故、議会側は戦争を始めることができたのでしょうか？

A たしかに王はそれらのものを支配下においていましたが大した意味をなしませんでした。というのも、海軍や弾薬庫などを管理していた者も、訓練された兵士たちも、多くの臣民と同様に長老派の牧師の説教を聞いたり、いかさまで無知の政治屋どもの言いふらしている話を耳にしたりしているうちに王に敵対する様になったからです。おまけに、王は議会から与えられる金しかあてにできなかったのであり、その額は王の正規軍を保持するには不十分だったのです。議会としては王から軍隊をとり上げたいと考えていたくらいですから。しかし、王が長老派であるスコットランド国民に国教会の祈祷書を採用するように強制する迄、議会側は王と戦争をしようなどとは考えもしなかったのです。というのも、英国民は議会が王に戦いを仕掛けるなど、どんな事があっても、ありえないことだと思っていたのですから、自分たちの身を守る必要があればともかく、王の側が先に戦いをしかけて来ない限り手を出せないと考えていました。というわけで、議会側は何とかして王を怒らせて、敵対的行為と見える行為に踏み切らせるのが得策だと見たのです。°

3. 内乱のひろがり

クロムウェルの指揮のもとでの鉄甲騎兵隊の活躍で議会軍は数倍の兵力をもつ国王軍（23000）を Marston Moor の戦いで打ち破って大勝、議会軍が数

百名を失ったのにひきかえ、国王軍は4000ないし7000（戦傷の為）が戦死、1500が議会軍の捕虜となった。

マーストン・ムーアの戦いの細部は当時を再現した文書から十分に想像できる。

長い血みどろの戦いの終わった翌7月3日（1644年）、マーストン・ムーアの荒地に白白と夜が明けると数千の屍体が散乱している風景がひろがった。正規に耐えない残酷な最期を遂げた死者たちがあたりを埋めつくしていた。多くの兵士は砲弾の破片や槍で突かれた傷からの出血で死んで行った。至るところで腹を鉾槍で裂かれた馬が倒れていた。一連隊に軍医が2人いるかいなかの時代であり、野戦病院などある筈もなく、応急手当すらなされていない。馬が刺されたはずみで落馬した議会軍の騎兵は王の兵士に槍を突き立てられたまま死んでいた。

騎兵隊の旗手だったゲイブリル・ラドロウは腹を裂かれ腸があふれだしたまま死を前にして苦しみもがいていた。銃弾と砲弾の破片が屍の骨を砕いていた。ゲイブリルは全身で震えながら苦悶のうちにそばの従兄のエドモンドに向かって死ぬ前に最後のキスをしておくれと哀願した。¹⁰

マーストン・ムーアの戦いの数日後、オリバー・クロムウェルは友人で義弟にあたるウォルトン大佐に手紙を書いた。

「(前略) 今回の圧倒的な勝利は数々の証拠からみても主の恵みがわれわれ敬神の党派に専ら与えられたことは明らかなことでございます。我々は突撃は行いませんでしたが敵を大いに攪乱しました。私の指揮した左翼の部隊は騎兵でしたが後方のスコットランド軍は別としてルパート王子の騎兵を全滅させました。神の手により彼らは我々の剣になぎ倒されたのでした。我々騎兵は敵の歩兵連隊の中に突込み、向うところすべてを粉碎しました。詳細はここで申しませんが、王党

派の20000の軍勢で残っているのは4000以下だと思えます。神に栄光を、すべての栄光を神に捧げます。

さて、神は貴殿のご長男を召されました。砲弾があたり、脚が折れたのです。我々は切断の止むなきに至りましたが、その為にご令息は他界されたのです。…立派な青年でした。勇敢で優雅ですらあったのです。殿の大切な御子息で栄誉に満ちた方だったのに、まことに残念で、これ以上罪深い仕打ちと悲しみもないとお察し申し上げます。令息は最期には安らかなご様子で、フランク・ラッセルと私に向って、「その安らぎは言い現わし得ないもので、痛みにまさるほどの大きなものだ」と告げられたのです。…いい方で軍の中では皆に好かれていました。でも、そのような貴重な方だったので神に召され今は天国で聖徒になっておられるのですから、どうか喜んであげて下さい。私には貴殿に友人として何とお慰めしてよいか言葉も見つからず、ただ、事実をありのままにお知らせして、貴殿がキリストのお力におすがりして個人の苦しみも神の教会につくす好機ととらえて、耐えて行かれますようご祈念申し上げます…」¹¹

マーストン・ムーアの勝利にはずみを得た議会軍は鉄甲騎兵隊^{アイアンサイド}を拡充して新型軍をつくり、これにより連戦連勝を重ねた。その勝利の多くはクロムウェルの軍事的才覚に加えて、兵士たちの士気と時の運に支えられた。こうして可能となった破竹の進撃は当初は議会軍も予想しえなかった有利な戦況をもたらした。1645年のネイスビイの戦いのあと完全に軍事的優位に立った議会軍側は掃討作戦を行って王を追いつめて交渉のテーブルにつかせることを考えた。

この時期に皇太子のチャールズ（後のチャールズ二世）は非常事態にそなえてパリに亡命宮廷をひらいた。ホップズが依頼されてチャールズに数学を教えはじめるようになったのはこの時期であった。チャールズ皇太子は1630

年生れなので15才くらいであった。ホップズは数学以外は教えなかったが、皇太子に進講したことは、1651年クロムウェル支配下のロンドンにホップズが帰国するとき心配の種となった。

1647年になると、英国では内戦が長びいたため議会軍はもう1年分も兵士の給料が未払いで不満分子の中には分派行動をとるものもあらわれた。この段階で思いがけぬ事態が発生した。議会軍の連隊旗手のジョイスという裁縫師上りで扇動家型の人物が500名の兵をひきいて王の宿舎のあるホルデンビイに行き、王の護衛役のグレーヴズ大佐を逮捕する序でにチャールズ1世まで捕縛してしまった。こうして事態は一転して囚われの王と議会との交渉の場にかわった。総司令官フェアファックスをはじめとする議会流の軍部はチャールズを人質としながらも国首としての鄭重な遇し方をした。一時はクロムウェルと王との間に和解の協定が結ばれる可能性すら見られた。クロムウェルはチャールズがピューリタンの政治的権利を議会において全面的に認めるなら王の復権もありうるとしたのだった。しかし、したたかなチャールズは囚われの身でありながら、その間も外交使節に接見し、議会内の独立派（つまりクロムウェルやフェアファックスなどをリーダーとするピューリタン）を抑えるためにスコットランドに英国侵攻を求めるなどの密約を行うなどチャールズが両派を天秤にかけていたことが明らかになると議会派の兵士や民衆はそれまで自分たちに強いられてきた犠牲と弾圧にたいする見返りを求めて騒ぎを起した。これに応えるかたちで議会の独立派は、王の裁判と共和制の確立を求める要求を議会に提出した。ところが長老派の多数によってそれが否定される雲行きと見た軍事評議会は12月、命令を下してプライド大佐にウェストミンスター議場近くで部下の兵士と待伏せさせ、長老派議員約100名を下院から排除し、ほかの抵抗する議院39名を捕らえて一室に監禁した。彼らは近くの居酒屋「地獄」で監視のもとに一晚を過した。こうして反対勢力を一掃したあと、下院に残った「残党議会」の100人ばかりの議員のうち半数がピューリタンであり、あとのものはたとい王党派の主張を支持

しようとしても欠席も多く議決に必要な40名の定足数すら満たし得ない状況であった。¹²

上院の残った少数議員はこの残党議会の無効性を宣言したが残党議会はそれを無視しただけでなく、自分たちは市民に選ばれた代表であって国の主権を有すると宣言し、王を裁く特別法廷の設置の布告を行った。この法廷を構成する135名が指名されたが開廷に先んじて開かれた集会に出席したものはたったの52名に過ぎなかった。

正式の法廷がはじまってフェアファックスの名が法廷で呼ばれたとき傍聴席から「賢い人間ならこんなところにくる筈がない」という声がし、皆が振り返るとフェアファックス夫人だった。彼女は王の罪状が読み上げられた際も、「大多数の英国民の名により」という言葉にたいし、すかさず、“It’s a lie, not half, nor a quarter of the people. Oliver Cromwell is a traitor.”と半畳を入れるのだった。¹³ クロムウェルにしても王を反逆罪で裁くにも法的根拠がないことを知っていたので、追放はともかく死刑の求刑をするのは行きすぎだと思っていた。しかし、英国民の弁護人として立ったクックが、チャールズが英国民の信託に反して専制政治を行い、国民の意志の代表機関たる議会にたいして戦争を行ったが故に暴君、裏切者、人殺し、国家にたいする許し難い公敵であるという理由から死刑にすべしと糾弾し、議長のブラッドショウによって集められた死罪の評決に65名中59名が承諾の署名をした。¹⁴ チャールズは三度弁明を求められ3度とも自己の罪状を否定し拘留のために弱っていたにせよ終始、君主としての態度を失わなかった。王が警護にあたる兵士の列の間を通るとき兵士の中には「陛下、神のご加護のあります様に」と叫んだ為上官から頭を杖で叩かれた者がいた。王はそれを咎めて“The punishment, methinks, exceeds the offence.”「犯した罪にたいして罰が苛酷に過ぎるではないか」とたしなめたという。¹⁵

1649年の1月30日の寒い日、黒山の群集の凝視する中、Whitehallのバル

コニーから張り出した処刑台の数段を王はしっかりとした足どりで登った。傍に付き添ったジャクスン僧正が「これまでの道のりは長うございましたが、一瞬のもとに歓喜と慰めの彼方にお着きになれます」と言う。「行くぞ、腐りゆく王国を捨てて腐ることのない王国に向うのだ」と王は応じた。「陛下はこの世の冠を永遠の冠にお変えになるのです」¹⁶チャールズは長衣を脱ぎ、頸にかけた聖ジョージ十字章を僧正に渡し「形見にせよ」と言った。それからかぶとの^{ヴェイザー}面頬を深くおろした首斬役人に向って「髪の毛も一緒に斬るのかね」と語りかけてから膝まずき、台の上に静かに形のよい頭を横たえた瞬間、重い鋼鉄の斧が一閃して王の首はほとばしる血潮とともに転った。処刑人が首を高く差し挙げて大声で「これぞ謀叛人の首なり」と叫んだ。処刑台のまわりを囲んでいた人々が一斉に台の上に這い上り、手にした手巾に王の血をひたそうと先を争った。処刑の行われる寸前まで、台の上を舞って追っても逃げようともしなかった野鴨の群れのうちの一羽が、首が転がった瞬間、急降下してきて、そのくちばしに王の血潮を含むと仲間の鴨とともに何処ともなく飛び去ったという。¹⁶

チャールズ一世の処刑のニュースにヨーロッパの諸国民は驚愕すると共に、各政府は一斉に反撥した。チャールズ皇太子は国外にあってただちにチャールズ二世として即位した。しかし、彼が王としてロンドンで復位する1660年まで英国には王がいなかった。英国は共和国となった。それはピューリタンの兵士が夢にまで見た民主的で平等で幸福な社会となるための政治的条件であった。しかし、王を殺したあと、国際的な非難の槍玉にあげられることを覚悟して誰かが王にかわる役を勤めねばならなかった。軍人として優れた能力を示したクロムウェルは自分が王になりたいがために暴君殺しの筋書きを設定した訳でも演じた訳でもなかった。とは言え、先輩であり戦友であるフェアファックスがスコットランド軍が大挙して英国に進撃をはじめようとしているのに、スコットランド軍を討伐することは同じ信仰仲間を敵と

することで到底出来かねるとして身をひそめてしまったとき、誰が混乱したこの無政府状態に終止符をうてると言えるだろうか。オリバー、お前が征け、という天上の声があったとは思えない。長老派は民主主義的な宗教観を共通して持っている点では独立派のピューリタンとは兄弟の宗派ではないか。どうしてフェアファックスが嫌だと言うことを自分なら応と言えるのだろうか。クロムウェルは岐路に立っていつも逡巡する。決定を迫るのはいつも周囲の状況であり、舞台から指名をきらう人物が全部逃げてしまったあと、ひとりうつつむいて祈っていた自分に気付くのがオリバー・クロムウェルであった。もはや任務を否定することすらも許されない程事態は進行し、火の手は迫っていた。

注

- 1 ホブズスの伝記については Hobbes, *Leviathan*, (Penguin BKS, 1968) の C.B.MacPherson の Introduction ならびに水田洋、田中浩両氏による解説 (『リヴァイアサン』(河出書房新社, 1974所収) のほか John Aubrey, *Brief Lives* (ed. O.L.Dick, 1949) の Hobbes の項を参照した。
- 2 Denis Richard, *Britain Under the Tudors & Stuarts*, (London, 1958), p.231.
- 3 Prynne のほか John Bartwick と Henry Burton などピューリタンとして星室庁の判決を受けた、星室庁には Court of High Commission が教会裁判所である為死刑や四肢切断など教義上できなことを捕う役割があった。同上 p.223.
- 4 この点については小野修『アイルランド紛争』(明石書店, 1991年) 33-56頁を参照
- 5 Denis Richard, op. cit. p.234.
- 6 David Hume, *A History of England*, Book V (The Student's Hume, New York, 1887) p.390以下、議会と王党派の交戦に至るまでの経緯と情景はこのヒュームの著作に従った。
- 7 David Hume, op. cit. pp.393-94.
- 8 Samuel S. De Sacy, *Descartes par lui-même*, (Paris, 1973) p.25.
- 9 Thomas Hobbes, *English Works*, Vol.6, pp.198-99.
- 10 Antonia Frazer, *Cromwell: Our Chief of Men* (London, 1973) p.130. 引用箇所は正確には Peter Young, *Marston Moor 1644, The Campaign and the Battle*, (1970) からであり、原典は不明、訳文は短縮してある。

文中のエドモンド・ラドロウの父は過激派の国家議員で、長期議会の際、王に在位の資格なしと発言して議長から譴責処分を受けた。このときのことをクロムウェルは記憶していて、生前の勇姿をその息子のエドモンドに賞讃を込めて語ったという。この点は Frazer, *Cromwell*, 上掲書, p.186.

11 Thomas Carlyle, *Oliver Cromwell's Letters and Speeches*, I, (London, 1845), p.188 宛名の Walton 大佐の妻はクロムウェルの末の妹のマーガレットであったからクロムウェルは死者の伯父にあたる。

12 Antonia Frazer, op. cit pp.269-70.

13 Frazer, p.283.

14 王の処刑を承諾したこの Warrant の日付けが27日から30日に書き直されたあとが歴然と写真版でもわかる。法的にこれが有効な修正か疑わしい。署名者の数が少なかったので予定の27日に処刑ができずにとられる。署名を強要されたインゴルズビイのような者もいると云われる。クロムウェル等が嫌がるこの男を無理やり押さえつけてペンをにぎらせて Richard Ingoldsby とサインさせたという。(Frazer, P.286-87)

15 Charles I の助命の嘆願書がルイ14世から Fairfax とクロムウェル宛に出されたし、皇太子は父君の命乞いの手紙を書き、赦免の条件に何であれすべて応ずるとして白紙に著名して、クロムウェルの遠縁にあたる Colonel John Cromwell をつかわしたがクロムウェルは相手にしなかった。

Frazer はクロムウェルは王の処刑をやめさせることもできた立場にいたのにそれをしなかった。この男はどたん場になると Fairfax とちがって、はるかに冷酷になると書いている。(Frazer, pp.288-89) 杖で兵士の頭を打った士官を咎めた話は Hume 前掲書, p.424.

16 このやりとりの key words は from a corruptible to an incorruptible crown, と a temporal crown for an eternal one である (David Hume 前掲書, p.425)。

Synopsis

Dangerous Aspects of the English Revolution

Osamu Ono

Essential parts of human history teem with incidents in which the quest for power by some section of society drive the entire nation into chaos. This series of actions is political in itself so far as the struggle for power continues until they culminate in the decisive moment to open up a totally different situation which we call revolution, signifying constitutional changes. In this new development, the state of a proclaimed nation often treads a difficult path in finding support both from inside and outside of the nation, namely, in recognition from international society.

The history of the English revolution provides us some of the most instructive lessons of history that cast light to help us understand the violent procedure of revolution in its detail. The English revolution marks one incomparable incident in the history of England, i. e., the decapitation of the Crown, Charles I, in 1649. This single political action divides British (English, also) history into two parts, before and after the execution.

Right after the execution, the Parliamentarians of the Independent sect and their followers, which had mandated Oliver Cromwell the military power, took hold of the English government and proclaimed the Commonwealth with Oliver Cromwell as the head of the state braving the storm of criticism from European monarchs.

The English societies before and after the birth of the Commonwealth were so different in their structure of body politics that people, especially those who

had previously claimed for the change of institution through the overthrow of the kingly government, were saddened by the drastic changes in the taxation policy which forced people, both who had and had not, to bear multiplied burdens in terms of the land tax and excise. With these advantages at hand, the Cromwellian government had a free hand in its revenue and expenditure.

Cromwell was a family man and was by no means a fanatic, which is well documented in history. But, as a model of representative Englishmen, Cromwell was a last person who could say no (like Fairfax, Cromwell's senior commander) in a desperate situation for his men. We are intrigued by the fact that he was reluctant at first to sign the warrant paper for the execution of Charles I. The same Cromwell seemed blood thirsty in his decision to order tens of thousands of soldiers under his command in Ireland to go on rampage, ending in the massacre of five thousand innocent civilians in 1650, only to commence the revitalized ethnic cleansing policy in Ireland followed by the war with Holland and the war after that in which tens of thousands of Irish rebels were banished to the Caribbean islands.

Popular support for Cromwell quickly subsides as his dictatorship in militarist Protectorate turned out as oppressive as the medieval theocracy in which the Parliament itself had ceased to function at the last stage of the Cromwellian rule.

The Lord Protector himself had been slowly consumed by the malarian germ contracted in the Ireland campaign. His son, Richard, appointed successor, quickly made himself an exile in France as the situation became too hot for him to handle. The Restoration was brought about by Charles II on whose government descended the enormous state debt made by Cromwell's government, making Charles II unable to seek a path to guide the nation back to pre-revolution days.